日本農業新聞　2017年(平成29年)11月22日(水曜日)

きょう歩き

協同組合の本質 合唱と重なる

束ねれば大きな力に

農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄一氏

窪島誠一郎作詩、池辺晋一郎作曲の合唱組曲「こわしてはいけない―無言館をうたう」が、長野県駒ケ根市で開かれた平和音楽会で、うたごえサークル〝ざざむし〟を中心とした約100人もの合唱で響き渡った。これは、長野県と神戸市の合唱愛好家有志が両氏に委嘱して作られたものだ。

合唱に先立って、作詩をした窪島氏の講演が行われた。窪島氏は上田市にある戦没画学生慰霊美術館「無言館」の館長である。窪島氏が戦没画学生の描いた絵を集めるようになったのは、画家で文化勲章受章者でもある野見山暁治氏からの、自分は太平洋戦争の折、戦地で病気になって内地に戻り生き残ったが、生きては帰れなかったたくさんの画学生がいる。その画学生たちを慰霊したい、との話がきっかけであった。

全国87カ所を慰霊のために訪れたが、「画学生の描いた絵を集めるのは無理」との野見山画伯の話に反して、意外にも1点、2点と集まり始め、結果的には何十点という絵が集まった。

画学生は繰り上げ卒業となった者も多く、その絵は技術的レベルの高いものは少なく、一つ一つは「しょぼくれた絵」ではあるが、これらを並べてみると、画学生の「もっと描きたい」「もっと生きたい」という声が聞こえてくるようになった。そこで無言館の設立を決心し、全国に呼び掛けて基金を募り、開設に至った。開館20周年を記念し、昨年、この曲が生まれた。

画学生の声を詩にしたものを合唱で聞いた時に、画学生が混じって一緒に歌っているような気がした。一人一人の声は小さくても、肉声が束ねられた時の大きな力を感じた。

そして曲が出来上がった時に、曲の名前をどうするか、ひと悶着（もんちゃく）あった。当初、「こわれそうなもの」としていたが、結局、自分たちがどうするのかが問われているということで「こわしてはいけない」で決着した、と窪島氏は語る。

まさに協同組合の本質にぴったり重なる話ではないか。一人一人の力は小さくても、束ねれば大きな力となる。そして一人一人の「もっとよく生きたい」いう強い思いが、「こわしてはいけない」ものを守り、伝えていくことを可能にする。感動の講演と合唱であった。

（次回は29日付）